

# 埼玉県立 小児医療センターだより

## ●埼玉県立小児医療センター

〒330-8777 埼玉県さいたま市中央区新都心1番地2

Tel ▶ 048-601-2200 (代表) Fax ▶ 048-601-2201 E-mail ▶ n581811@pref.saitama.lg.jp

URL ▶ <https://www.pref.saitama.lg.jp/scm-c/index.html>



埼玉県マスコット「コバトン」

## さいたま新都心医療拠点における生体肝移植

移植センター長 水田 耕一



2019年4月に埼玉県立小児医療センター移植センター長・移植外科長として赴任致しました水田耕一と申します。移植外科は、2019年度（令和元年度）から、埼玉県立小児医療センターに新設された診療科です。当センターと隣接するさいたま赤十字病院に「さいたま新都心医療拠点・移植センター」を設置し、県内で初めて小児生体肝移植手術の実施体制を整備しました。さいたま新都心医療拠点における二施設連携の医療は、総合周産期母子医療、高度救命救急医療、先天性心疾患に対するカテーテル治療などに続く医療連携となります。

小児肝移植の対象となる疾患は、胆道閉鎖症やアラジール症候群などの胆汁うっ滞性疾患を中心に、Wilson病、尿素サイクル異常症、有機酸代謝異常症などの先天代謝異常症。その他、劇症肝炎、肝芽腫、先天性門脈欠損症など多岐にわたります。当センターは埼玉県の小児医療の三次医療機関で、小児がん拠点病院でもあるため、このような重症な子どもたちの診療に多く携わってきました。内科的・外科的治療で根治が得られず肝移植が必要となった場合、これまで東京都の成育医療研究センターや、私の前任地である栃木県の自治医科大学などの小児肝移植施設に手術を依頼していました。しかしながら肝移植治療は入院から退院まで約2ヶ月を要するため、ご家族には治療の間、病院近くに拠点を移して頂く必要がありました。また生涯続く県外への外来通院もご家族にご負担をかけていました。当センターでの肝移植開始によって、埼玉県の肝移植を必要とする子どもたちとご家族へ、地域完結型のシームレスな移植医療の提供が可能となりました。

わが国で生体肝移植が始まってから30年以上が経過し、一般医療の一つとして定着しつつありますが、多くのマンパワーを必要とする医療であることには変わりありません。さいたま新都心医療拠点における生体肝移植は、ドナー手術はさいたま赤十字病院外科が、レシピエント手術は、当センター麻酔科、移植外科、小児外科、形成外科が協働して行っています。ドナーとなるご家族が成人施設に入院できることは大きなメリットであり、子どもたちへの術後の面会も隣接しているため困ることはありません。レシピエントの術後も、集中治療科、放射線科、消化器・肝臓科、血液・腫瘍科、感染免疫・アレルギー科、病理診断科など、専門性の高い先生方との連携で、きめ細かな周術期管理ができます。また、小児医療に高いスキルを持った看護師、薬剤師、理学療法士、管理栄養士、臨床工学技士、臨床心理士らが、移植コーディネーターを中心に連携しチーム医療を展開しています。

2019年9月よりスタートした生体肝移植は、2021年1月現在11例となりました。お陰様で全例成功し、ドナー、レシピエントともに順調に経過しております。良好な治療成績が得られているのは、患者さん一人一人を丁寧に管理できる診療体制に加えて、治療に携わっている多くの人々の熱意と強いチームワークによって支えられていることを実感しています。移植手術や術後管理に直接関わる診療科だけでなく、術前の検査や管理にご協力を頂いている内科系診療科、安全な移植手術の遂行のために手術制限にご理解を頂いている外科系診療科、そして、このプロジェクトの準備段階からご指導ご支援頂いた埼玉県病院局、病院幹部職員、事務職員の皆様を含め、関わっている全ての皆様に改めて心より感謝申し上げます。

今後は、施設の経験に応じて、肝移植手術の質と量を高めていく予定であり、急性肝不全に対する肝移植の実施や、脳死肝移植施設認定を目標としています。新型コロナウイルス感染症の収束が見えない中、当センターでは引き続き重症患者の受け入れと感染防止策を強化しながら、肝移植をはじめとする安全な高度医療を県民の皆様に提供して参りますので、今後とも皆様のご支援を賜りますようよろしくお願ひ申し上げます。

## 埼玉県立小児医療センターだより 第19号 ご案内

- |                          |                               |
|--------------------------|-------------------------------|
| ○ 移植センター長あいさつ ..... p. 1 | ○ 12A 病棟の紹介 ..... p. 5        |
| ○ 代謝・内分泌科の紹介 ..... p. 2  | ○ お知らせ                        |
| ○ 整形外科の紹介 ..... p. 3     | 感染対策、令和3年度休日診療について ..... p. 6 |
| ○ 医療安全管理室の紹介 ..... p. 4  | 受診の案内・病院へのアクセス ..... p. 6     |

## &lt;診療部門紹介①&gt;

## 代謝・内分泌科



科長 あいづ かつや  
会津 克哉

代謝内分泌科は、主にホルモンの異常および先天代謝異常による病気を診療しています。当科を受診するきっかけとして多いものには、「身長が小柄である（低身長）」・「身長の伸びが良くない」・「身長の伸びが良すぎる」といった身長に関係すること、「体重の増えが良くない（やせ）」・「体重が増えすぎる（肥満）」といった体重に関係すること、「陰毛が生えてきた」、低年齢の女の子で「胸がふくらんできた」・「生理が始まった」といった身体の外見上に関係すること、そして「甲状腺が腫大している」、「学校検尿で尿糖陽性を指摘された」、「生まれてすぐの検査で異常があると言われた」などがあります。具体的に当科で診ている病気は、成長ホルモン分泌不全性低身長症、ターナー症候群、肥満（肥満症も含む）、思春期早発症、甲状腺機能亢進症、甲状腺機能低下症、尿崩症、糖尿病（1型、2型）、先天性甲状腺機能低下症、先天性副腎過形成症、フェニールケトン尿症、クル病などです。また当センターはさいたま市を除く埼玉県全体の新生児マスククリーニング検査（タンデムマスによる）を行っており、陽性患者には当科の医師が出生した病院を通して親に受診を促し、早期に診断し治療をおこなっています。

治療は医師だけではなく、糖尿病・肥満・アミノ酸代謝異常症（フェニールケトン尿症など）・尿素サイクル異常症など食事療法が必要な疾患に対しては、管理栄養士も積極的に診療に加わっています。

近年、医療の進歩はめざましく、新しい薬剤・機器の開発に伴い治療方法も変化してきています。糖尿病領域において、特に1型糖尿病について紹介します。1型糖尿病の治療にはインスリン治療が不可欠ですが、これまでの1日4回程度のインスリン皮下注射による治療だけではなく、インスリンポンプを用いたCSII療法（持続皮下インスリン注入療法）、更には持続血糖モニター（CGM）の登場で、皮下組織に穿刺したセンサにより、間質液中のグルコース濃度を連続して測定する機器を併用したSAP療法が普及してきています。現在当科では100名を超える小児期発症1型糖尿病の診療を行っており、約30%の患者さんにCSII療法をおこなって血糖コントロールをしています。良好な血糖コントロールを保つためには血糖自己測定が必要ですが、前述したCGMの機器でポンプと連動しない持続血糖測定器（フリースタイルリブレ、デキスコムG4など）を用いることで、CSII療法を行っていない患者さんも血糖変動を容易に知ることができます。当科では約65%の患者さんにCGMを導入し、血糖自己測定と併せて治療に用いています。これらの治療方法を個々の患者さん毎にその時の生活スタイルに合わせて、適宜相談しながら対応しています。

当科では糖尿病専門医や内分泌専門医を有した小児科医が、各々の領域において新しい治療を進んで取り入れ研鑽することで、患者さんのQOLが少しでも良くなるように心掛けて診療しています。また、当科で診療する疾患は小児医療だけではなく、成人医療も必要とするものが多いため、小児病院という特殊性から内科へ引き継いでいくことが必須のため、移行期医療にも取り組んでいます。

今後とも皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

<スタッフ>会津克哉、河野智敬、田嶋朝子、田代昌久、望月弘



## &lt;診療部門紹介②&gt;

## 整形外科



科長 たいら かつあき 平良 勝章

整形外科では四肢の先天異常や、脊椎疾患、股関節疾患、スポーツ障害、外傷など取り扱う疾患は非常に多岐にわたります。小児と成人では扱う疾患が大きく異なり、成長途上であるがゆえに多くのnormal variantが多く存在します。また、修復能力や自家矯正能に長けているのも小児の大きな特徴で、治療を行う上で子供達が持っている「治す力」を上手に利用することが大切と考えています。治療にあたっては患児、家族、他科医師、看護師、理学療法士、作業療法士、義肢装具士との連携を重視し、成長終了時によりよい日常生活を送れるように、適切な時期に適切な治療が受けられる場を提供したいと強く感じて診療にあたっています。当センターの大きな特色としてけやき特別支援学校が併設されており、学童期に発症するペルテス病や大腿骨頭すべり症、麻痺性疾患など長期入院が必要な症例では勉強しながら治療を行えます。学習面でのサポートは勿論のこと、他児や教師との交流が精神的な面で非常に重要な役割を果しています。

## (外来)

整形外科一般外来は週3回（火・木・金）、常勤医師4名、レジデント1名体制で診療を行っております。完全予約制ではありますが、緊急性の高い骨折や、化膿性疾患、早期治療が必要な先天性内反足などは電話連絡にて随時受け付けております。一般外来に加えて、装具診外来として週1回（毎週火曜日）、整形外科医、理学療法士、義肢装具士が連携して個別に十分に検討を行い、装具の処方、作製までを一貫して行っています。同時にseating clinicを開設し、複数の専門業者と協力して車椅子、座位保持装置などの作製も行っています。平成22年度より開始した脳性麻痺児に対するボツリヌス療法（ボトックス注射）も継続して行っております。また、毎月第1金曜日には痙攣治療外来（11時～12時）を開設しており、脳神経外科医、理学療法士、小児科医、整形外科医と一緒に診察する機会を設け、患児を集学的に診察し、適切な時期に適切な治療を選択するようにしております。令和2年10月より重症痙攣患者に対するITB（バクロフェン持続髄注療法）も脳神経外科で開始しており当科でもサポートを行っています。その他の専門外来としては脊柱側弯症専門外来（町田医師、野原医師）にも協力いただいている。小児がん拠点病院になったことを受け、当センター血液・腫瘍科、埼玉県立がんセンター整形外科、自治医科大学附属さいたま医療センター整形外科と連携をとって悪性腫瘍、良性腫瘍の治療も行っております。

## (手術)

手術件数は令和元年度448件（表）と過去最高となり増加しています。新病院移転後の救急部設立の影響で骨折が激増し、骨折手術が109件となりました。上腕骨頸上骨折が最多であります。夜間、休日対応としては、受傷時のアセスメントと画像評価、介達牽引治療までは当センターの外傷診療科の医師が担ってくれており、必要に応じて当科オンコール医師が対応するシステムとなっています。

新規事業として、平成30年6月より脊柱側弯症の手術も開始しました。令和元年度は特発性側弯症を中心に13件の手術をおこなっています。今後は症候性側弯症の症例も増加すると予測していますが、術後は当センターのPICUでの管理をお願いすることもできる点は当センターの利点だと考えています。

## 手術件数推移



今後日本社会は少子化への加速は避けられない状況ですが、小児整形外科疾患はいわゆる「Rare Disease」となっていくのでしょうか。小児整形外科疾患の診療施設の集約化も更に進んでいくのかもしれません。しかし、rare diseaseとなっても、近隣の先生方と連携を密にし、地域で子供たちの成長を見守っていく事は今後も大切なことだと認識しております。For the future, for the children（こどもたちの未来は私たちの未来）を基本理念とし、先進的かつ良好で安全な医療を提供していくよう邁進いたします。

## (整形外科常勤スタッフ)

平良勝章（小児整形外科、成長期スポーツ障害）  
根本菜穂（小児整形外科、手外科、足の外科）  
及川昇（小児整形外科、股関節外科、膝関節外科）  
町田真理（小児脊椎、側弯症）令和3年4月～

## (非常勤スタッフ)

長尾聰哉（手外科）  
町田正文（側弯症専門）  
野原亜也斗（側弯症専門）

## <部門紹介>

# 医療安全管理室



医療安全管理室長 望月 弘 副病院長  
医療安全管理者 水村こず枝

医療安全管理室は、当センターにおける医療の安全確保を図るために組織横断的な体制が重要であると考え、良質で安全な医療の確保を目的として、2006年に設置されました。

日々、患者さん、ご家族へ提供されている安全な医療・ケアは基本となるものであり、職員一人ひとりが、医療安全の必要性・重要性を自身の課題と認識すること、安全な医療・ケアを徹底することが重要となります。

医療安全管理室は、病院長の直轄の部門とし、医療安全管理者・医薬品安全管理者・医療機器安全管理者と共に組織横断的な活動をしています。院内の医療安全に関する根幹の委員会として医療安全管理委員会を設け、その傘下にリスクマネージャー会議、院内救急検討会、呼吸サポートチーム会議、輸血療法委員会、放射線安全委員会、医療安全看護部小委員会により医療安全体制を確立しています。各委員会で協議を図り調整し、医療安全管理指針及び医療安全対策マニュアルの作成・改訂を定期的に行ってています。さらに、事象分析や医療事故分析により新たなマニュアル作成、安全確認行動の順守状況確認、部署の課題発見のため、チームで医療安全ラウンドを行っています。また、医療者の安全確認行動を評価するため、患者さん、ご家族および他職種から「指さし呼称」の調査を行い、医療安全推進週間にその結果を提示し医療安全管理の充実に向けています。

そのためには、当センター職員の医療安全に関する認識や向上につながる研修開催も重要なことと考えています。それぞれ職種や経験値は異なりますが、「共に働くチームの一員であること」を共有・理解するために、2011年から3Wordの導入、2012年からチームSTEPPS研修を導入しています。導入開始から継続して9年が経過し、受講人数は延べ5643名となりました。



チームでトライ!! チームSTEPPS研修

この研修では参加するメンバーが、毎回、異なるため、より強く「チーム」を認識・再確認することができ、部署間でのコミュニケーションも図れています。今年度は、COVID感染防止対策として方法を変え、自身の所属する部署内でチームSTEPPS研修を開催しました。より日常のチームを認識することができたようです。毎年、調査している医療に関する安全文化調査の結果で、「部署内でのチームワーク」の側面の偏差値が3.77ポイント向上しましたが、向上の要因の一つには研修方法の変更もあると考えられます。

これからも患者さん、ご家族への医療・ケアを安全に提供するために、当センター職員と共に取り組んでいきたいと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。



指さし呼称アンケートへのご協力



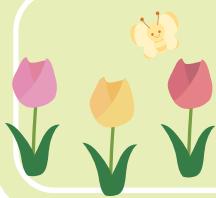
部署で取組む3Word

\*世界患者安全の日は9月17日です。「患者安全を促進すべく世界保健機関（以下、WHO）加盟国による世界的な連携と行動に向けた活動をすること」を目的として、医療制度を利用する全ての人々のリスクを軽減するために2019年WHO総会で制定されました。

\*医療安全推進週間は毎年11月25日を含む1週間です。（2001年から厚生労働省）

## &lt;看護部紹介&gt;

## 12A 病棟

いづつ みちこ  
井筒 道子

## 【病棟概要】

12A病棟は、小児医療センターの最上階の12階にあります。天気が良い日は、窓からスカイツリーを見ることもでき、とても景色の良い場所にあります。病床数は36床で、個室が12床、4床の大部屋が6部屋あります。主な診療科は、整形外科、感染免疫科、神経科、消化器・肝臓科、代謝・内分泌科、総合診療科、眼科で、外科系と内科系の混合病棟です。乳児から学童期まで幅広い年齢の患者さんを受け入れています。また、長期間入院されている患者さんや、日帰りで検査や点滴治療される患者さんも受け入れています。

## 【日々の生活について】

入院が2週間以上の長期になる学童期の患者さんは、同じ建物内の7階にある「けやき特別支援学校」への就学支援を行っています。病気の治療を受けながら学校に通い、入院中も途切れることなく勉強が続けられるので、地域へ戻ったときに安心して元の生活に戻れます。朝は、8時半に学校へ登校し、昼休みは病棟に戻って昼食を摂ってから、午後の授業へ再登校します。学校では、友達との交流や学校行事などもあります。治療の都合や体調が優れず登校が難しい時は、ベッド上の学習（床上学習）や、テレビでのリモート授業なども実施しています。授業時間に配慮しながら治療や看護ケアを実施しています。また、学童期の患者さんは、一日の生活習慣が家庭と同じように過ごせるよう援助しています。小児の入院はゲーム依存となりやすく、将来ギャンブル依存などに影響を及ぼすと懸念されています。当病棟では、入院時にご本人とご家族に対して丁寧に説明し、入院中のゲーム依存を予防するように働きかけています。

最近は、消化器症状の病気を患って入院されるお子さんが増えています。学校生活でのストレスが、身体に影響していることが考えられます。下痢・嘔吐など消化器症状は感染拡大につながる可能性があります。そのため、感染拡大を防ぐ目的で個室での入院が余儀なくされます。看護師はできる限りコミュニケーションを図って、患者さんの精神的支援も行っています。そして、元気に退院していく姿をみると、私たち看護師もうれしく感じ活力になります。また、幼児や乳児の入院も多く、病棟保育士と連携し入院中の児の発達支援にも力を注いでいます。この時期の子どもは、これから成長して様々なことを確立していく大切な時期でもあります。子どもも家族と離れ、不安と病気でストレスが増強し、発達にも影響を及ぼす可能性があります。保育士の視点・理学療法士の視点など多職種と連携しながら、子どもの発達支援に取り組んでいます。

## 【近況報告】

毎朝、患者さんの所にラウンドに行くと、「看護師さん、おはよう」と笑顔で答えてくれます。病棟看護師の元気の源になっています。病気で入院しても、必ず退院して家庭で過ごせるように、一日でも早くその日を迎えるように願っています。今は、新型コロナ対策での面会制限などで子どもとご家族には今までより困難な入院生活になっています。そのようなご家族と子どもたちに対して、どのような支援ができるか日々模索しています。クリスマス会は、感染対策を考慮して実施しました。当病棟では、子どもたちの「こころ」が元気になるような看護を心掛けています。退院の時に、手紙を書いてくれるお子さんがいました。

「〇〇さんみたいな看護師になることが夢になりました。」学童期は、将来の夢を具体的に想像し、夢に向かって歩み始める時期です。子どもたちがこれから長い人生を歩んでいく中、良い思い出の1ページになるように、私たちは、子どもたちと一緒に頑張りたいと思っています。



窓から見えるスカイツリー



病室内での床上学習



季節によって飾り付けが変わる病棟入口



プレイルームで保育士さんと遊んでいる風景



プレイルームで夏祭りの飾りつけ

# お知らせ

**感染対策のお願い**

- 院内では患者さん、付添い者、全ての方にマスクの着用をお願いしています。  
(小さなお子さん、マスクが苦手なお子さんは必要ありません。)
- 入館時に健康チェックを行っています。患者さん、付添い者、同居者（来院していない方）に、下記症状がある場合は入館及び診察をお断りさせていただきます。（37.5℃以上の発熱、鼻水、咳、発疹、24時間以内の下痢、おう吐、接触確認アプリCOCOAに「接触あり」の通知が14日以内に来ていた場合）
- きょうだいを連れての入館はお断りしております。
- 外来の付添い、入院面会での院内への立入りは保護者1名とさせていただきます。

※新型コロナウイルス感染症の情勢により、感染対策を変更する場合がございますので、詳しくは病院ホームページをご覧ください。こちらのQRコードを読み取りください。

令和3年度休日の  
外来診療の  
お知らせ

4月29日(木 祝日)「昭和の日」	通常診療
7月22日(木 祝日)「海の日」	通常診療
8月 9日(月 休日)「山の日」の振替	通常診療

※電話予約の受付  
もおこないます。

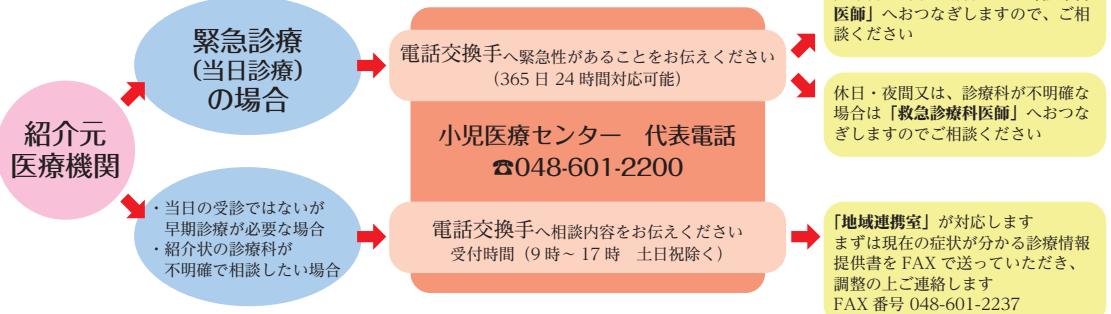



## 医療機関の皆様へ 受診のご案内

### ①患者ご家族からのご予約



### ②医療機関の先生からのご予約・お問い合わせ



## 病院へのアクセス



### ■公共交通機関をご利用の方

- JR京浜東北線、宇都宮線、高崎線「さいたま新都心駅」から徒歩約5分
  - JR埼京線「北与野駅」から徒歩約6分
- \*歩行者用デッキを点線に沿ってお進みください。

### ■お車をご利用の方

- 駐車場は有料になります。
  - 機械式駐車場には車両のサイズの制限があります。
- \*ご利用の時間帯によっては、車両が集中し、入庫まで大変お時間がかかることが予想されます。
- できるだけ、公共交通機関のご利用をお願いいたします。

## 小児医療センターだより第19号

令和3年3月発行

編集・発行 埼玉県立小児医療センター  
地域連携・相談支援センター